

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 8 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02301

研究課題名(和文) イギリス・ロマン主義におけるテキストと物質的環境の研究

研究課題名(英文) Re-Reading British Romantic Texts in View of Materialist Environmentalism

研究代表者

小口 一郎 (Koguchi, Ichiro)

大阪大学・言語文化研究科(言語文化専攻)・教授

研究者番号：70205368

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：近年の地球規模の環境悪化を反映し、人文学においても自然と人間・文化の関係を文化論やテキスト解釈の観点から研究する「環境批評」が重要な研究分野となってきた。

本研究では、環境批評のなかから自然環境の物質性とその文化的認識に焦点をあてた21世紀の理論的潮流を考察し、そこで得られた知見から、自然環境の現代的意識が成立したロマン主義時代のテキストを分析した。環境思想や環境文学の原型となったロマン主義の文化テキストを先端的理論から解釈し直し、その現代的意義を再評価するとともに、環境批評理論を文化テキストや文化史解釈の武器としてさらに鍛えることを意図した。

研究成果の概要(英文)： Ecocriticism has become one of the most important schools of literary-cultural criticism of the modern era. It aims to study the relationship between the natural environment and human culture, and how this relationship is represented in various textual practice of the present and past.

The current research project has focused on the materialist turn occurring in present-day ecocritical theory, utilising some of its insights and interpretive methods in analysing and re-assessing British Romantic texts of the late 18th and early 19th century. Romanticism has a privileged status for ecocriticism, because this cultural movement served to establish some important prototypes of ecological philosophy and environmental literature of today. By incorporating the 21st century development of ecocriticism in its analytical approach, this research project shed new light on the environmental significance of Romanticism, as well as enhancing the interpretative capacity of ecocriticism itself.

研究分野：イギリス・ロマン主義

キーワード：環境批評 物質性 ロマン主義 ワーズワス 自然 能動的行為者 他者

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始の時点で、環境批評 (ecocriticism) は 30 年近い実績を積んでいた。そこには環境問題が人類共通の喫緊の問題となり、この問題を考察することが文学・文化批評のような人文学研究にとっても重要な課題となってきたことが背景にある。学問研究が、究極的には人間個人および人類全体の良き生活・幸福 (well-being) を目的とするものであることを考えれば、これは当然の流れであったろう。

こうした環境批評における 21 世紀の一つの顕著な傾向に、物質的環境批評・唯物論的環境批評 (material ecocriticism) の興隆があった。

文化生産の主体としての人間を、精神だけに還元することなく、その肉体や身体性をも批評的考察の対象とする流れは 20 世紀後半から見られ、現在に至るまで大きな成果を上げている。本研究が主要な対象としたロマン主義についても、特に身体器官としての脳に注目した重要な研究が発表されている。人間・文化は、身体性や物理性と切り離しては考えられないとする傾向が、すでに用意されていたのである。

物質的環境批評は、人間が物理環境の中においてこそ存在するものであるという理解や、人間主体は身体性・物質性に立脚するという意識が現代の環境危機の認識とあいまって成立した、現代的な必然性をもつ批評的立場であり、特に 2000 年代の後半以降、James C. McKusick, Onno Orlemans, Kate Rigby, Mary Jacobus, Serenella Iovino and Serpil Oppermannらにより、批評理論と解釈実践においてめざましい業績をあげつつある。

本研究の開始時点は、現代批評の発展の中でこのような歴史的に重要な局面にあった。

## 2. 研究の目的

本研究は、このように環境批評の必然の流れである物質的環境批評に、イギリス・ロマン主義研究の立場から新たな貢献をしようとするものであった。

ロマン主義時代は、その直前の 18 世紀を含め、現代の環境意識や環境思想の直接の祖となった言説を生み出した特別な時代である。そうした言説は、200 年の時を超えて、現代の思想的な取り組みに有効な視座を与える可能性を秘めているのである。

現代の先端的な環境批評は、学術活動として疑いない明白な存在価値や重要性を持つが、そのために、ともすれば自身の理論構築へと内向し、他の思想的・批評的視点を等閑視する唯我独尊的なものとなる傾向がないではない。ロマン主義時代の環境意識や思想の観

点から、現代の環境批評を考察することは、批評実践として重要性なばかりか、環境批評の現代の視点を歴史的に相対化することによって、この批評により厚みのある文化・思想性を与え、社会的にも意義のある学術的営為として再構築する可能性をもっている。

本研究は、このような観点から、環境批評に歴史的観点から重層的な次元を与え、さらにロマン主義時代の言説の解釈によってその解釈力や理論的枠組みをさらに強化する目的をもって開始された。

## 3. 研究の方法

本研究の方法は、1) 現代環境批評の理論的研究、2) ロマン主義言説の環境論的解釈、そして 3) ロマン主義環境言説の研究から、現代環境批評を相対化し、発展させるという 3 つの次元からなる。

### 1) 現代環境批評の理論的研究

環境批評や環境哲学の近年の展開をあとづけ、本研究の理論的基盤を構築した。具体的には、Steven Vogel が 1990 年代に提案した、自然解釈の 4 類型をマトリックスとし、そこに近年の環境批評理論を位置づけることで体系的な環境批評の見取り図を作成した。

Steven Vogel は、自然についての近・現代思想を精査し、「起源としての自然」「自然についての批判的解釈」「差異としての自然」「実践のなかであらわれる自然」の 4 つの類型を提起している (*Against Nature* [State U of New York P]; “Nature as Origin and Difference” [Pearson])。「起源」は、近代的自然観の底流をなすロゴス中心主義的な考え方であり、それを超える思想的営為が 20 世紀哲学における「批判」および「差異としての自然」である。そしてこれらの思想がおちいる可能性のある、消極的な非行動主義を克服しつつ、ナイーブな起源論を回避する、より新しい方向性として「実践」をとらえた。

Vogel の類型を基盤とすると、20 世紀後半からの脱構築的な自然観は「批判」から「差異」へと展開する運動として理解できる。環境批評は脱構築的な立場から起源なき「他者」としての自然環境という概念を案出したが、それは「差異」的自然の理論的帰結である。Timothy Morton, *Ecology without Nature* (Harvard UP) や Lawrence Buell による環境批評の可能性の議論など (*The Future of Environmental Criticism* [Blackwell])、近年の重要な環境批評家理論は、この流れの中に位置づけることができるほか、本研究がその重要性を注目した Kate Rigby の、起源不在の存在である「他者」としての自然環境の議論もこの枠組みの可能性を推し進めたものとして理解することができた (“Earth, World, Text” *NLH* 35)。そして、さらに最近の物質的環境

批評は、「もの」としての環境が他者であるばかりではなく、アフォーダンスの担い手として、行為者性 (agency) を有すると論ずるのだが、これも「差異」論から「実践」へと展開する Vogel の枠組みに照らして明確に定義することができる。

## 2) ロマン主義言説の環境論的解釈

ロマン主義は「起源」としての自然を提起しつつ、そこからこぼれ落ちる他者性を意識していたアンビヴァレントな文化運動であった。これは、これまでの人文学研究が明らかにしていることである。

本研究では、理論的枠組みの考察がもたらした環境批評的なパースペクティブに基づき、ロマン主義時代を画したいくつかの文化言説を、物質性の観点から再解釈し、個々の作品とロマン主義言説総体のとらえ直しを試みた。また、後述するように、批評理論への貢献も目指した。

これまでのロマン主義研究においては、「起源」と「批判」についてすでにかかなりの積み上げがあり、自然をナイーブに起源として見ると観点と、それに対するポストモダン的な批判は研究者コミュニティに十分共有されていると言える。そこで、本研究のプログラムとしては、特に Vogel の枠組みから「差異」=「他者」としての環境、そして「実践」=「行為者」としての自然および自然の一部としての人間、の2つの側面を選び出し、そこにロマン主義言説を画する作品や文書を選び出し、物質的環境批評の面から分析した。

ここで「他者」とは、非在でありながら、認知世界を根拠づけるものである。ロマン主義に典型的にあらわれる風景描写テキストには、こうした「他者」とその問題性が表れていた。具体的には、18世紀の前ロマン主義と、ロマン主義盛期のテキストにおいて、風景描写が及ばない亀裂的な非在の瞬間を求め、そこに「他者」の痕跡を読み取り、その意義を物質性の観点から考察するアプローチをとった。

ロマン主義のテキストには汎神論的な世界像が表れることが多く、そうした世界像は、これまで宗教的思想の垂流として神学的に考察されることが多かった。この研究では、そうした世界観を、主体の認識や経験に密着した身体レベルの体験として、あえてよりプリミティブな観点に引き戻して考察した。これにより、汎神論の視点からは見えづかった万有生命論の観点——すなわち物質には生命と主体性が内在するとの観点——が射程に入り、自然における物理的存在が行為者として実感されるロマン主義的な体験を、理論的に定義した。これによって自然環境が思想的・感情的「実践」の場として、人間主体と

共同して文化創造的な役割を果たしていたことを論じられた。

## 3) 環境批評への貢献

上述のように、ロマン主義時代は現代の主要な環境言説がうみ出し、その意味で直接的に現代環境批評や環境思想のルーツであったと言える。この文化運動については、環境批評が成立する前から、特に自然観を中心として多くの研究がなされてきた。環境批評は新しい分野であるだけに、理論・解釈の両面において盲点や、妥当性を欠く展開も多いように思われる。その反面伝統的なロマン主義研究においては、過去の研究によって、かなりの程度多くの研究者が合意できる考察が達成されていると言える。ロマン主義研究が提供することのできる、有効性の高い研究的知見の観点から、環境批評をレビューすることによって、この新しい批評分野の成熟と、未来のより適切な展開の方向性を導けるものと考えられる。

この観点から、物質の行為者性という概念に関してロマン主義研究においてすでに原型的な議論が積み重ねられていることを本研究は指摘し、環境批評はそれを参照することによって、自らを歴史的に相対化し、客観的な認識をもち、ひいては今後の発展を実現することができるという立場をとった。

## 4. 研究成果

### 1) 現代環境批評の理論的研究

本研究は、おおむね「3. 研究の方法」で述べた手順にしたがって考察を進めたが、その第一段階となる環境批評理論のレビューについては、まとまった出版物としてではなく、各論文や著書の章、講演において、議論の前提となる理論や解釈方法の解説において著している。よってこの面での発表成果はやや断片的になっている。そのなかから、特に顕著な学術的貢献となったと思われる論述を抜き出し、理論的成果の一端を示したい。主に、Kate Rigby の理論の再解釈を中心としている。

Kate Rigby の理論は、現代芸術が自然環境を相手に創造活動する場合、環境という存在は表象不可能な「他者」にとどまり、非在の「痕跡」だけが自然的なものが確かに存在した証拠であると論じる。Rigby の議論は、多分にポスト構造主義的であり、記号の世界の彼方を示唆する現代芸術の評価が主眼であった。本研究では、Vogel の議論や、環境の物質性に焦点をあてた Iovino and Oppermann, *Material Ecocriticism* (Indiana UP) などの、より現代的な環境批評の観点から Rigby の指摘した非在の痕跡を、物質的自然がとりうる唯一の顕現の形態であると考え、整理したうえでロマン主義言説の解釈に適用した。

さらに Rigby が触れていた、コミュニケーションの主体としての環境を、Iovino and Oppermann, Stacy Alaimo, “Trans-Corporeal Feminism and the Ethical Space of Nature” (*Material Feminisms* [Indiana UP]), Karen Barad, “Posthumanist Performativity” (*Material Feminisms* [Indiana UP]) など、より最近の理論が議論している物質の行為者性の枠組みにおいて再考察した。これによって、ロマン主義言説が頻繁にとりあげる「生きている自然」を、新しい環境批評的観点から見直すことが容易になった。

## 2) ロマン主義言説の環境論的解釈

ロマン主義に先行する 18 世紀には、自然の外観を描写する「叙景」が一大潮流となり、文学ジャンルにおいても、多くの叙景詩が書かれた。なかでも丘の上などの高所から風景を見下ろす眺望的な観点をとる作品が目目された。これらの作品のなかでも、James Thomson の *The Seasons* や Edward Young の *Night Thoughts* には、叙景の連続のなかで一瞬描写が途切れる亀裂的な場面がある。こうした場面はいくつかの特徴から、Rigby が現代芸術に読み取った自然の痕跡に通底するものであり、その意味から、ことばという記号によって覆い尽くされた叙景言説が、みずからの次元を超えたところに想定される世界=自然環境を顕現させる瞬間であると解釈できる。

ロマン主義時代に移ると、叙景は自然に生命が横溢することを認識するようになり、さらに語り手の意識や感情を反映する主観的な行為になっていく。ロマン主義の本格的な始まりを画したのは、William Wordsworth の世代の詩人たちがであったが、彼らの作品の核心にはこうした新しい自然描写=主観的叙景があった。

第一級の作家たちが、優れた主観的叙景を残しているが、なかでも Wordsworth の作品には、上述の亀裂的瞬間が、作品におけるいくつかの決定的な転換点として潜んでいる。代表作の *The Prelude* は、語り手の問いかけに回答してくれる自然を連続して描きながら、ときにまったく人間主体の働きかけに応じることのない、無慈悲な自然の相貌を表すことがあった。この冷たい自然の顕現は、“The Ruined Cottage”、“Lucy poems”、“Poems on the Naming of Places”、“Kirkstone Pass” など、彼の他の作品とあわせて考察すると、人間主体が自然とともに創出する呼応的關係が不可能になる一瞬であり、人間の願望や命運とはまったく関係のない、ただそこにあるだけの存在としての自然が示唆される瞬間であると解釈できる。換言すれば、これは非人間的で「唯物的」にしか存在しない自然の痕跡的提示であり、その意味で Wordsworth の創作活動には、18 世紀の叙景詩に遡及するだけでな

く、Rigby その他の現代の環境理論家たちの理論形成と通底する思想的営みが含まれていたということになる。このように現代環境批評の洞察の一つは、ロマン主義の意義をよりよく理解するための手段を提供し、同じロマン主義は現代環境批評の展開の適切性を裏付ける役割を果たしてくれている。

ロマン主義時代における主観的風景描写においては、Wordsworth の存在が圧倒的だが、それ以外にも Samuel Taylor Coleridge、Percy Bysshe Shelley、John Clare などが同様の様相を示す。特に Shelley の抒情的叙景詩は、Wordsworth が示唆した冷たい物質的自然をさらに先鋭に示し、同時に人間の願望による自然環境の囲い込みを告発し続ける言説であった。

ロマン主義時代には、言語理論も興味深い展開を示している。Coleridge らが、高度な観念論的な言語理論を構想する一方、この時代の言語観の主流は、純粋に経験主義的なものであり、William Godwin、William Hazlitt、William Cobbett らの文法書が、前の時代の James Harris らの合理的言語観にとって代わっている。この動きは、言語と世界、記号と「もの」との接近と一致を憧憬する思想の表れであった。

なかでも、ロマン主義のただ中である 18 世紀の終わりから 19 世紀の始まりの時期に執筆された John Horne Tooke の英語語源論 *Epea Pteroenta* は、言語記号は本来、「もの」そのものを直接的に指し示していたはずだという確信に基づく理論形成であった。このなかで Tooke は、英語の語彙のすべてを語源的に名詞に還元したうえで、名詞こそ指示対象である「もの」と最も近接した記号であること、動詞を含むすべてのことばは、たとえ不変化詞や助動詞であろうと、究極的には名詞由来であると主張している。

Tooke の議論の根底には、民主主義を支持する政治的立場などの要素もあるものの、言葉と「もの」、人間の内面と外的世界、精神と環境を限りなく接近させ一致させていこうとする願望が存在している。このことから、ロマン主義の時代には、主観性、文化記号、社会制度などによって覆い隠されていく「自然」的な次元に、直接的に接触したいという機運が高まっていたと推測できる。Wordsworth ら、抒情的叙景文学を書いた文人たちが、言語芸術の高度な文化実践のなかで垣間見ようとした基底としての自然、「もの」としての自然を、言語思想家たちはより直截にとらえようとしていたと言えるだろう。言語理論は非常にナイーブな形で、文学は高度に洗練された次元で、「他者」である「物質的自然」という同一の目標を目指していたのだ。

本研究は、これらイギリスにおける展開とともに、アメリカのロマン主義の代表的作家である Henry David Thoreau においても、Wordsworth と似た物質的環境の顕現があることを確認した。研究の基盤はあくまでもイギリス・ロマン主義にあるが、Thoreau における「他者」的な自然環境の考察は、本来のイギリス・ロマン主義の研究を逆照射してくれる結果となった。

Thoreau の後期の作品には、「行為者」性をもつ自然環境が非常になまなましく描かれる。Thoreau においても「他者」としての物質的自然が顕現する特権的な瞬間があるが、行為者としての自然は、その「他者」の顕現と同時に明らかになる。自然は能動的行為者として立ち現れ、同じく行為者としての Thoreau の人間主体とともに、自然の経験を共同で紡ぎ続けていく。Thoreau の言説は 19 世紀中期のものであり、宗教性が希薄であるがゆえに、通常ならば非生命体を生きものとして認識することには困難があるはずである。にもかかわらず Thoreau は、基本的に非宗教的な観点から、読み手に説得力ある形でこのような「行為者」としての自然を提示する。さらにこの観点は、20 世紀の Also Leopoldo のネイチャーライティングと環境思想にも受け継がれている。

翻って Thoreau の約半世紀前にイギリスに生きた Wordsworth らは、無神論の Shelley を除けば、自然宗教的な観点から生命をもつ自然物を論じることがまだ可能であった状況に生きていた。それは神学的な性質を帯びた営為であるとも言えるが、Thoreau の観点から遡及すれば、イギリス・ロマン主義においてもアメリカと同様の行為者的な自然の認識が見られると考えることも可能である。この観点から Wordsworth らの汎神論詩は、環境論的に再定義することが可能である。

ロマン主義の作品には、物質的他者として、そして一見それとは相反するかのように行行為者存在として、自然環境が書き込まれていた。それは Wordsworth らの芸術的創造性の成果であったのだろうが、環境論的立場からすれば、ロマン主義的主体と環境の相互行為の所産であるとも言えるだろう。

### 3) 環境批評への貢献

このように本研究は 18 世紀からロマン主義へ、そしてアメリカへの言及を経由して、イギリスへの逆照射へと、環境言説を他者、物質、行為者の立場から論じている。

ポストモダンの言語的批評における「他者」の問題は、環境批評に移せば何らかの「彼岸」的次元を指し示すであろうことは容易に想像できたが、それは理論的な考察にとどまる

ものであり、この分野で重要な Rigby な理論的・解釈的提起も、比較的小さな規模の議論に留まっていた。本研究は、18 世紀の叙景言説、ロマン主義の抒情的叙景詩、そして 19 世紀アメリカのネイチャーライティングにおいて、「他者」を物質的環境に明確に結びつけるテキスト上の証拠を多数提示することによって、解釈の面から理論に貢献している。

また、自然の行為者性という新しい概念についても、同様に歴史的テキストの中に明示的な例を指摘している。また、環境批評における行為者としての物質的自然の議論が、ロマン主義によって先取りされていたこと、そしてごく一端にはすぎないが、その系譜をアメリカ・ロマン主義とネイチャーライティングにたどることができた。環境批評は、ときに高度な理論性を標榜し、生産的ではあるが実証的根拠において危ういことがあるようにも思われる。また、歴史的系譜にときに無頓着であるがゆえに、ナイーブな主張に陥る可能性もある。本研究ではそうした環境批評のあり方を少しでも是正し、より建設的な未来を志向するものでもあった。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

1. KOGUCHI, Ichiro. “Contact with Materiality: Wordsworth’s Alps and Thoreau’s Ktaadn.” 『言語文化研究』 44 巻 (2018 年): 223-41. 査読有 info:doi/10.18910/68022

2. KOGUCHI Ichiro. (Review) “Saeko Yoshikawa, *William Wordsworth and the Invention of Tourism, 1820-1900*.” 『イギリス・ロマン派研究』 第 39/40 合併号 (2015 年): 212-16. 査読有

3. KOGUCHI, Ichiro. “Shadow of the Non-Corresponding Other: “Material Nature” in Wordsworth’s Poetry.” *IVY* 48 巻 (2015 年): 27-51. 査読有

[学会発表] (計 4 件)

1. 小口一郎「William Wordsworth, “Steamboats and Railways” — 「人間の時代」と環境」イギリス・ロマン派講座 (招待講演), 日本女子大学, 2018 年 6 月 30 日.

2. 小口一郎「ワーズワスに環境感受性を探る (2) — 切られる木をいたむ」イギリス・ロマン派講座 (招待講演), 日本女子大学, 2017 年 7 月 1 日.

3. 小口一郎「ワーズワスに環境感受性を探る」イギリス・ロマン派講座 (招待講演),

早稲田大学教育学部, 2016年7月2日.

4. 小口一郎「呼応なき「他者」—— ワーズワスにおける物質的自然」名古屋大学英文学会第54回大会(招待講演), 名古屋大学文学研究科, 2015年4月18日.

〔図書〕(計2件)

1. 小口一郎「エコロジーのテキストを読む」小口一郎他編『英語教育徹底リフレッシュ——グローバル化と21世紀型の教育——』開拓社, 2017年. pp. 278-86.

2. 小口一郎「自然神学と人口論—マルサスと環境倫理」小口一郎編『ロマン主義エコロジーの詩学—環境感受性の芽生えと展開』音羽書房鶴見書店, 2015年. pp. 57-82.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小口 一郎 (KOGUCHI, Ichiro)  
大阪大学・大学院言語文化研究科・教授  
研究者番号: 70205368